Information

まもなく *CCS*創刊！

City, Culture and Society(CCS) は、文化創造と社会的包摂を旗印とし、都市のガバナンスとマネジメントを中心に扱う学術ジャーナルである。都市研究プラザが編集母体となり世界的学術出版社のエルゼビア社（本社オランダ）から年4回刊行される。60数名のボードメンバーには世界各国の著名な研究者が名を連ね、オックスフォード大学、ミシガン大学にも編集サブセンターを設置するなど、世界的な編集ネットワークを構築している。本誌は日本にのみならず世界的にみても国際学術誌として優れた編集体制を持つものである。

本誌の創刊によって、コミュニティに向き合ったアートマネジメントや都市文化政策、文化政策と福祉政策の融合、社会的企業と行政との連携、共助のシステムを内包した都市ガバナンスのあり方などを論点とした都市に関する先駆的な研究を推進し、課題に対応する新たな都市づくりのためのビジョンおよび権限を有する都市行政に資することが可能となった。

記念すべき創刊号では、創刊にふさわしく世界的に著名な研究者から、以下に示す優れた内容の論考の投稿がなされている。

Saskia Sassen; *The City:Its Return as a Lens for Social Theory*

Andy Pratt; *Creative cities: Tensions within and between social, cultural and economic development. A critical reading of the UK experience*

Edmond Preteceille; *The Fragile Urban Situation of Cultural Producers in Paris*

Shin Nakagawa, Koichi Suwa; *A Cultural Approach to Recovery Assistance Following Urban Disasters*

Jean-Charles Chebat, Lamia Kerzazi, Haithem Zourrig; *Impact of Culture on Dissatisfied Customers: An Empirical Study*

これはボードメンバーとエルゼビア社の協力のもとに、佐々木編集長、岡野編集局長のリーダーシップによるところが大きいが、なによりも大阪市立大学長をはじめとした大学関係諸機関（者）の大いなるサポートが、創刊の原動力となったことをここに示す。あらためて関係各位に感謝の意を表したい。

なお、*CCS*創刊号に関しては、次号のニューズレターにて、改めて報告する予定である。

■堀口朋亨（都市研究プラザ特任講師）

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページでご覧ください。

8/25☒ アベノ思ひ出アルバムと活動寫眞
☒ …阿倍野・寺西家 第3ユニット

9/10☒ 第２回市大中之島講座「生活保護をとりまく現状と都市の再生」
☒ …大阪市役所

9/13☒ G-COE特別研究員（若手）研究発表会
☒ …大阪市立大学

9/18☒ こりあんコミュニティ研究会・第17回定例研究会
☒ …大阪市立大学 第3ユニット

9/23☒ 第2回創造都市政策セミナー
～24☒…ヨコハマ創造都市センター他 第1ユニット

10/2☒ アジア欧州会議首脳会合　国際ワークショップ
～3☒ …ブリュッセル（EU） 第1,2ユニット

10/9☒ 一橋大学　関西アカデミア「都市の創造性」
☒ …ザ・フェニックスホール 第1,3ユニット

10/9☒ 日中伝統芸能競演会「文楽素浄瑠璃と評弾の至芸」
☒ ～大阪市立大学創立130周年記念事業～
☒ …大阪市立大学学術情報総合センター

11/1☒ シンポジウム「産業と文化：大阪の未来へ」
☒ ～大阪市立大学創立130周年記念事業～
☒ …綿業会館ホール

11/1☒ 第5回船場建築祭　まちのコモンズVol.5
～7☒ …船場界隈 第2ユニット

11/11☒ 国際ワークショップ ‘Traceable Cities’
～12☒…マンチェスター大学 第4ユニット

12/15☒ 第一回国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」
～17☒国際シンポジウム「文化創造と社会包摂による都市の再興」
☒ ～大阪市立大学創立130周年記念事業～
☒ …大阪国際交流センター

■特別研究員（若手）公募
G-COE特別研究員(若手)募集(平成23年2月募集分)　2011年1月に公表を予定しています。
情報⇒ http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html

■URP-Newsletter　次号発行予定は、2010年11月です。

URP Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設（現場プラザ、海外サブセンター）を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/

558-8585　大阪市住吉区杉本3-3-138　tel：06-6605-2071
e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長　佐々木雅幸　　副所長　水内俊雄　岡野 浩　冨田常雄
ユニット長　1U 佐々木雅幸　2U 中川 眞　3U 水内俊雄　4U 岡野 浩
http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/

大阪市立大学 都市研究プラザ　ニューズレター　第８号　2010年８月
編集委員会　佐藤由美、橋羽 愛
http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/

URP Osaka City University

Newsletter

Issue 8, Aug. 2010

大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第8号　2010年８月

keyword's column

居住文化
【Housing Culture】

民俗学を開拓した柳田國男は、1930年に刊行された『明治大正史世相篇』で、都市生活者の住宅は「狭溢なる一時的の仮住（かりずまい）」と述べている。彼らは、都市で出世し、故郷の農村に錦をかざるのが夢であった。

この時期の大阪では、「新開地」と呼ばれる木造・長屋建の借家が猛烈な勢いで建設された。新開地の住民は、はじめは烏合の衆であった。やがて壁や屋根を共有する親密なコミュニティが生まれ、豊かな人間関係をもつ地域社会が形成されていった。そして都市の住宅は「終の住処（ついすみか）」に変わった。

戦災をへて、昭和30年代後半の高度経済成長を境に、都市の住まいは一変した。持家政策による借家の減少、郊外住宅地の開発、都心人口の空洞化、高層共同住宅の登場に押されて、大阪の長屋文化はすたれていった。

ところが、大阪・梅田にほど近い豊崎プラザは、昔ながらの路地と木造の長屋住宅がそのまま残り、住民どうしの気遣いや住まい方のルールが健在な地域である。近年、都心居住が見直され、長屋文化が再評価されている。都市研究プラザでは、豊崎プラザのハード（建物）とソフト（暮らし）を現代社会によみがえらせる社会実験を進めており、大阪の居住文化に基づいた都市再生モデルとして注目されている。

谷　直樹（都市研究プラザ運営委員/生活科学研究科教授）

In his *Meiji-taishoshi sesohen,* published in 1930, Yanagita Kunio, the pioneer of Japanese folklore studies, describes the housing of city dwellers as 'cramped and crowded temporary dwellings (*karizumai*).' The dream of such people was to go to the city in order to return and burnish their home villages in the countryside.

In Osaka at that time wooden and *nagaya* rental housing was built at a furious pace as 'newly opened land' or *shinkaichi*. At first the people living in the *shinkaichi* were jumbled all together. Eventually close communities of people sharing the same walls and roof came into being and a local society was formed with rich human relationships. Thus urban housing changed into a 'place to live out one's life.'

After the destruction of war, life in the city changed drastically with the period of high economic growth of the late 1960s and 1970s as the turning point. With the decline in rental housing due to home ownership policies, the development of housing in the suburbs, the hollowing out of the urban population, and the appearance of high rise multiple-unit housing, Osaka's *nagaya* culture fell on hard times.

However, the Toyosaki Plaza, fairly near to Osaka's Umeda, is in a neighborhood where *roji* and wooden *nagaya* housing still exist, where solicitude between neighbors and the rules of living together are thriving. In recent years views of inner city housing have changed and *nagaya* culture has been reevaluated. At the Urban Research Plaza we are encouraging the experiment to resurrect the 'hardware' (buildings) and 'software' (lifestyle) of Toyosaki Plaza in modern society, and it is attracting attention as a model for urban revival based on Osaka's housing culture.

TANI Naoki(URP Steering Commission/
Professor,Graduate School of Human Life Science)

特集 1

CITIES City, Culture, Social Inclusion 特集号発刊

SPECIAL 1 Publication of Special Issue : *CITIES* City, Culture, Social Inclusion

都市研究プラザは2006年4月に創設されて以来、積極的に研究活動を進め、現場プラザ・海外サブセンターにおける調査活動や海外の有力研究者との共同プロジェクト・共同研究が高い評価を得てグローバルCOEに選定された。日本における都市研究分野の有力研究機関として着実に学術的成果を積み重ねてきたと言っても良いであろう。プラザの活動は国際的なネットワークを形成し、海外から注目を集め、世界の有力研究者達と親密で実りのある協業が実現するようになった。

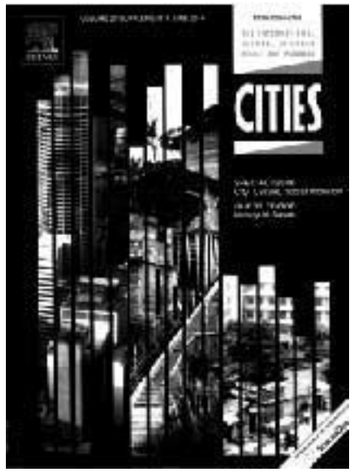
プラザの活動の国際化を象徴するものの一つが、国際学術誌*City, Culture and Society*(*CCS*)の創刊である。この創刊準備の為、岡野浩(都市研究プラザ副所長)はエルゼビア社のエグゼクティブ発行人であるDr.Chris Pringle氏と協議を繰り返した。都市研究プラザの活動と岡野の熱意に動かされたDr.Pringle氏は、世界的有力学術誌*CITIES*編集長(当時、現*CITIES*シティプロファイル編集長)であるAndrew Kirby氏(アリゾナ州立大学教授)を紹介し、Kirby氏は、*CCS*の射程と都市研究プラザの活動を高く評価し、佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)を*CITIES*のゲストエディターに指名したのである。そして、佐々木が編集した*CITIES*特別号は2010年7月に刊行され、*CCS*の射程を世界に向けて呈示した。

■*CITIES*と*City, Culture and Society*

*CITIES*は1983年創刊された都市研究分野における世界的有力学術誌である。論文の引用率から算出されるインパクトファクターは、約1.2～1.5であり、都市研究分野の学術誌として非常に高い値を記録している。純粋な学術論文を掲載するだけではなく、中央政府や地方政府の政策担当者に対して都市計画に関する情報を提供することをも目的とし、公共政策の枠組の範囲内で、住居・ホームレス・健康、都市マネジメント、官民セクター間の協力、技術革新、第三世界の開発計画問題、都市再生、都市保全、都市デザイン、都市計画、都市交通などを掲載対象として扱っている。

都市研究プラザが編集主体である*CCS*は、都市のガバナンスとマネジメントを中心に扱う学術誌であり、新たな都市づくりのためのビジョンおよび権限を有する都市行政に資することを目的とし、コミュニティに向き合ったアートマネジメントや都市文化政策、文化政策と福祉政策の融合、社会的企業と行政との連携、共助のシステムを内包した都市ガバナンスのあり方などを掲載対象としている。

*CCS*と*CITIES* は、編集目的と掲載対象を異にしている為、両誌のコラボレーションはお互いを補うこととなり、非常に大きな相乗効果が見込まれる。本特集号は、その第一弾として企画されたものであり、Kirby氏と佐々木、岡野が万全の準備を行い発刊された。



*CITIES*特集号表紙

■学術成果を世界に向けて呈示

*CITIES*特別号では、都市研究プラザから佐々木、岡野、水内俊雄(都市研究プラザ副所長)、中川眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)、全泓奎(都市研究プラザ准教授)が、海外サブセンターと*CCS*ボードメンバーからDanny Samson氏(メルボルン大学教授)、Seong-kyu Ha氏(韓国、中央大学教授)、Hyun Bang Shin氏(ロンドン大学LSEレクチャラー)の各氏によって執筆が行われた。プラザの研究活動によってもたらされた成果を示す為に論文の内容をごく簡単に紹介する。

Masayuki Sasaki, "*Urban regeneration through cultural creativity and social inclusion: Rethinking creative city theory through a Japanese case study*"では、金沢市や大阪市の豊富な事例の分析を行い、クリエイティブクラスが集まることで創造都市が形成されるというフロリダ理論の問題点を指摘し、蓄積された文化資本を利用した文化的生産と文化的消費のバランスこそが、創造都市の成立の必要条件であることを明示した。さらに、草の根からの活動によって、大阪が社会包摂型創造都市になる可能性があることを示唆した。

Hiroshi Okano, Danny Samson, "*Cultural urban branding and creative cities: A theoretical framework for promoting creativity in the public spaces*"では、BMW-MINIやモントリオールの人形劇場の事例を挙げ、都市の潜在能力を発揮する為の戦略的マネジメントシステムの確立を論ずると共に、その確立にデザインやアートが果たす役割の大きさを指摘した。

Shin Nakagawa, "*Socially inclusive cultural policy and arts-based urban community regeneration*"では、社会的排除の解決方法を探るのに、経済的支援や社会保障制度からの視点ではなく文化政策の視点から論じている。具体的には、大阪における現代アートに焦点を当てた文化政策の失敗という挫折から市民が自主努力でそれを乗り越えた事実に注目し、そこから市民と地方自治体が行うべき協業のあり方を論じた。

Toshio Mizuuchi, Hong Gyu Jeon, "*The new mode of urban renewal for the former outcaste minority people and areas in Japan*"では、政府による被差別部落に対する補助金行政の問題点を指摘し、被差別部落内部から生じた政府資金に依存しない自助的かつ創造的な地域開発の出現の意味を探っている。そしてそれは、高度に資本主義が発達した状況下における持続可能な社会に不可欠な先進的"まちづくり"の事例であると論じている。

Seong-Kyu Ha, "*Housing, social capital and community development in Seoul*"では、筆者の行ったソウル都市圏における「公共賃貸居住者－民間賃貸居住者」と「持ち家居住者－賃貸居住者」の差違に関するアンケート調査の結果から、社会的信頼、規範、ネットワークという社会的資本の諸要素が各グループ間で異なることを明らかにし、地域開発においてはこれらの諸要素のギャップを勘案し、持続可能なコミュニティの形成が促されるような開発とする配慮が必要性であることを指摘した。

Hyun Bang Shin, "*Urban conservation and revalorisation of dilapidated historic quarters: The case of Nanluoguxiang in Beijing*"では、北京の旧市街にある25カ所の歴史景観保全地域から幾つかの事例を取り上げている。保護政策によって中庭がある伝統的建物物が再生され、その美的価値に興味を持った不動産資本による参入が為されたことと、経済的便益ばかりが着目され、社会生活に対する注意を払うことが少なかった点を指摘している。

*CITIES*特集号の目次

■世界に向けて学術成果を発信し続ける都市研究プラザ

都市研究プラザは、G-COEに選定されるなど国内で高い評価を得ているが、その成果を世界に呈示することで、学問の発展を促し、全世界で発生している都市における社会問題の軽減に寄与することが使命の一つである。そのような使命感の下、都市研究プラザは、*CITIES*特別号のみならず、学術雑誌*CCS*や国際シンポジウム「都市の世紀を拓く－文化創造と社会包摂に向けての都市の再興」、国際学会AUCの創設などを通じて世界に向けて情報を発信し続けている。

■堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

Since the Urban Research Plaza was founded in April 2006 we have been active internationally, as in carrying out joint projects with noted foreign researchers and surveys at out field plazas and overseas sub-centers. Representative of that is the inaugural publication of the international academic journal *Cities, Culture and Society* (*CCS*). In preparing for this publication, Prof. Okano Hiroshi (vice director of the URP), after deliberating with Elsevier, Ltd.'s executive publisher Dr. Chris Pringle, was introduced to Arizona State University Prof. Andrew Kirby, now chief editor of the internationally renowned academic journal *CITIES* (at the time he was city profile editor of the same journal). Prof. Kirby was impressed by *CCS* and the activities of the Urban Research Plaza and he named Prof. Sasaki Masayuki (director of URP) to be a guest editor of *CITIES*. The special issue of *CITIES* edited by Prof. Sasaki was published in July 2010, targeting *CCS* at a worldwide audience.

This special issue featured articles written by Sasaki, Okano, Mizuuchi, Nakagawa, and Jeon of the URP, and from the overseas sub-centers and board of *CCS*, Prof. Danny Samson (Univ. of Melbourne), Prof. Seong-kyu Ha (Joongang Univ., S. Korea) and Dr. Hyun Bang Shin (Lecturer at Univ. of London).

特集2
SPECIAL 2

第1回 韓日ホームレス研究者交流会－韓日ホームレス研究の現状と展望－

The First "Research Exchange on Homelessness in Korea and Japan" : Current Conditions of Homelessness and Future Prospects

2010年7月9日(金)から7月10日(土)にかけて、URPソウルサブセンターと、韓国都市研究所、韓国保健社会研究院、そして韓国社会政策学会の共催により、第1回「韓日ホームレス研究者交流会」が行なわれた。両国でのホームレスにおける現状や支援の動向には共通点も多く、相互に交流を深める意義は高い。ホームレス問題における公的支援やNPO・NGO活動の実態・課題、そしてホームレス支援のあり方を議論する機会であり、本格的な共同研究を図っていく初の試みでもある。

■シンポジウム：韓日ホームレス研究の現状と展望

初日は、日本と韓国の研究者らが幅広い視点から研究報告を行った。日本側からは、水内俊雄、全泓奎、平川隆啓(以上、都市研究プラザ)、中山徹(大阪府立大学)、垣田裕介(大分大学)が、それぞれ「東アジア先進都市のホームレス問題」、「複合的居住支援によるホームレス支援の新たな方向の模索」、「刑余者問題とホームレス支援の邂逅」、「現段階のホームレス問題と就労支援」、「日本のホームレス支援資源と政策枠組み」について発表した。韓国側は、キム・スヒョン(世宗大学)、シン・ミョンホ(韓国都市研究所)、キム・ソヨン、ク・インフェ(ソウル大学)、ジュ・ヨンス(翰林大学)、ミン・ソヨン&イ・ビョンソク(京畿大学)、ナム・キチョル(同徳女子大)より報告がなされ、「日本の学者が見た東アジア先進都市のホームレス問題」、「露宿人のライフヒストリー分析」、「ライフヒストリーの観点からみたホームレス政策」、「ホームレスの死亡原因と変化様相」、「知的障がいホームレスのリハビリ施設での経験」、「ホームレス居住支援の類型別過程とアウトプット比較」という研究成果が披露された。

会場(韓国保健社会研究院)の様子

■ソウル市内での現場ツアー

2日目は、ホームレス支援の現場をフィールドワークした。トータルで6ヶ所を訪問し、韓国における現場支援の生々しい現状や課題、そして新たな事業や展望について把握した。

まず、路上生活者のために現場支援などを提供している「ホームレスタシソギ支援センター」を訪れ、当機関の説明を受けた。その後、ホームレスや生活困難者のために教育の場を提供している「人文学講座」と、先月に開始されたばかりの「炊き出しセンター」を視察した。

タシソギ支援センターのスタッフによる事業紹介

続いて「コシウォン(考試院)」と呼ばれる生活施設を見学。宿泊スペースは2畳ほどしかないが、低料金で利用できる。管理者からは、生活困難者の受け入れや支援の課題について話を聞いた。

2010年6月に新しく立ち上げられた「ビッグイシューコリア」(ホームレス当事者が路上で雑誌を販売する国際的・社会的企業)にも足を運んだ。7月には第1号が出版され、スタッフから活動の企画・運営や組織の経営について説明を受けた。ホームレス支援に取り組むソウル市が支援する社会的企業の斬新な試みを垣間見ることができた。

「ビッグイシューコリア」のスタッフによる活動の紹介

午後からは、ヨンドゥンポ(永登浦)にある「チョッパン(未認可簡易宿泊所)」エリアを視察した。木造等による2階建てほどのバラック小屋のような住居が建ち並ぶ。現在は再開発のプレッシャーにより、急激に規模を縮小している。見学した地区は、2015年までに完全に撤去されるらしい。「チョッパン」には多くの人たちが生活しているが、生活に困難を抱えている事例が多いと聞く。地区内の「チョッパン相談所」では、買上げ賃貸住宅への転居等、居住サポートが行われており、その買上げ住宅の見学も行った。

永登浦駅近くのチョッパンエリア視察

買い上げ賃貸住宅を見学

最後に訪れた「女性ホームレス支援センター」では、女性の路上生活の現状を目の当たりにした。ここは2004年に取り組みが開始され、シェルター機能のみならず、アウトリーチや居住サポート等、複合的に支援を行なっている。

■まとめ

今回の第1回韓日ホームレス研究者交流会への参加者は、合計約100名にのぼり、日韓におけるホームレス問題への関心の高まりがうかがわれた。研究者だけでなく、現場の支援者や、政府関係者からの参加もあり、分野を横断して意見が交わされた。両国の比較を通じて深めた議論は、多様な支援のあり方や、政府とNGO・NPOの連携等、これからの福祉政策にも提案可能な内容であった。多角的にホームレス研究を取り上げることで、旧来型のホームレスでは括れない複雑化するホームレス問題を明らかにし、今後の展望を描く布石を投じた。

今回の交流は単発的なものではなく、相互のさらなる発展に向けた第一歩として位置づけることができる。来年度は日本での開催を予定しており、日韓の研究者交流を軸足とした、東アジアをまたぐホームレス研究交流を計画している。

■ヒェラルド・コルナトウスキ(G-COE特別研究員)
平川隆啓(G-COE特別研究員)

On July 9-10, the URP Seoul Sub-center, Korea Center for City and Environment Research, The Korea Institute for Health and Social Affairs and Korean Association of Social Policy jointly organized the first Research Exchange on Homelessness in Korea and Japan. Both countries share similarities in regard to the actual conditions of homeless support and the challenges they are now facing. This has provided the incentive to organize for the first time a joint workshop to evaluate and discuss topics such as the status of official policy, NGO support activities, and suggestions and ideas to increase support adequacy.

The program consisted of a symposium dealing specifically with homeless research in both countries and a field trip covering visits to key support organizations and facilities.

Altogether more than 100 people participated, from which we can conclude that the issues presented arouse broad interest. Since not just researchers but also representatives of support NGOs and government officials participated, the workshop was a success in proposing and discussing ways to practically improve the current array of homeless support. Next year a second workshop will be held in Japan.

10 クリエイティブ・カフェ「よりクリエイティブなつながりとその価値を求めて～Cream Summit～」

'Cream Summit': Seeking More Creative Linkages and Their Value

「クリエイティブ・カフェ」は、大阪で地域再生、文化芸術などのさまざまな分野で、複雑な課題を抱えながら、現場で日々奮闘している人たちが集まり、自由に語り、聴くことを丁寧に積み重ねながら新たな創造へつなげる場として開催されている。14回目の開催となる今回は、2010年５月20日（木）、大阪創造都市市民会議主催・大阪市立大学都市研究プラザ（クリエイティブセンター阿波座）の協力で、クリエイティブ産業が集積する大阪市西区にあり、20余りのクリエイティブ系オフィスが入居するACDC（Asia Creative Design Center）ビルで開催された。

今回のテーマは、大阪・京都・神戸の３都市を中心にグラフィックデザイン、映像、写真、WEB、キャラクター等の分野のクリエイターが数万人規模で活動していることを背景に、その活動を支援するために生まれた様々な団体・施設が、お互いの活動の内容や目的を理解し、Creamのように解け合うSummitを目指したものである。クリエイティブ業界が急速に変化している今、普段は交流する機会がほとんどない各団体と現在活躍しているクリエイターやクリエイティブな生き方を模索する若い世代が一堂に会して、現在の活動から未来を展望する意欲的なイベントであった。

まず、佐々木雅幸（都市研究プラザ所長・大阪創造都市市民会議代表世話人）の開会あいさつの後、清水柾行氏（日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA））、荒木志華乃氏（パッケージデザイン協会＜JPDA＞）、高田雄吉氏（タイポグラフィ協会）、田中祥介氏（日本写真家協会＜JPS＞）、友田富造氏（広告写真家協会＜APA＞）、西野昌克氏（関西デザインオフィスユニオン＜KDOU＞ ）、山田祐也氏（大阪デジタルコンテンツビジネス創出協議会＜ODCC＞ ）、戸田克己氏（関西デジタルコンテンツ事業協同組合＜KANDIGI＞）、明田豊広氏（ソフト産業プラザ iMedio）より、各団体の歴史や活動の紹介、そして新たな取り組みの計画等が報告された。

そして、後半のラウンドテーブルでは、クリエイターに対して様々な意見が提示される中で、会員の創造活動支援に求められる団体の役割について意見交換がなされた。具体的に、会員の半数程度しか活動に参加していない現状に対して、会費を払ってでも参加して意義のある団体にするためにはどうしたらよいのか、各団体の取組みが報告され、意見交換が行われた。また、一般の人にもわかりやすい発信が求められているとの指摘から、団体の役割として、社会と積極的にコミットしていくことが提示された。最後に、今後、各団体がface to faceでつながっていくことが重要であり、そのためのネットワークを構築していくことが確認された。

開会のあいさつ　佐々木所長（中央右）

各団体の代表者によるラウンドテーブル

当日、同カフェには、多様なジャンルやキャリアのクリエイター、行政・民間企業・NPOに所属する人たち、研究者等、80名余りの参加があった。本カフェを通して、都市の中で様々な創造の場を生成し、運営する多様な主体が、創造性と新たな価値の創出、ネットワークの構築等に対して共通して高い関心を持っていることが明らかとなった。

その後、7月13日（火）には、大阪市立大学大学院創造都市研究科主催で開催された、サスティナブルなクリエイティブ活動のために創造性と経済システムの関係を考えるシンポジウムの中で、同カフェに参加した団体の中の２名が報告し、具体的な取組みへの展開が見られた。

■上野信子（G-COE特別研究員）

A 'Creative Cafe' titled 'Seeking More Creative Linkages and Their Value' was held at the ACDC Building in Osaka's Nishi Ward. It was sponsored by the Osaka Creative City Citizens' Conference with the cooperation of the Urban Research Plaza's 'Creative Center Awaza.'

During the first half there were reports on activities by various groups who assist creative endeavors, and in the second half there was an energetic exchange of opinions, beginning with the group members, about what is needed in order to contribute broadly to society. In the end they affirmed the intention to build a network that emphasizes face to face communication between each of the groups.

現場プラザ短信1

豊崎プラザ　大阪らしい長屋と路地の再生実験

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を柱に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。

学生からみた日本建築学会教育賞

施工実習の前にはしっかり準備体操

豊崎プラザを教材とした教育プログラム「大阪長屋の再生―ストック活用力育成プログラム」が2010年日本建築学会教育賞を受賞した。豊崎プラザでは、大阪の居住文化を代表する長屋の再生を行い、持続可能な創造都市論を展開している。

今回の受賞は、築後90年近い木造長屋の改修を通して、学生・院生が改修計画・現場実習・メンテナンス実習に関わり、実践的で総合的な住宅ストック活用力を習得し、大きく成長したことが評価された。改修計画を担当した学生は、朝一に現場で大工と打合せをし、夜遅くまで施工図面を描く毎日を過ごし、デザインや実務の能力を得ることができた。現場実習に参加した学生は、柱や梁の汚れ落しや灰汁洗い、建具の貼り替えなど、木造住宅の再生技術を学んだ。「ほんまもん」の建物は、学生のさまざまな可能性を引き出してくれる良質の教材である。この教育プログラムを通して、社会における役割や将来の進路に目覚めた学生も多くいる。

■上原　充（豊崎プラザ研究補助スタッフ）

現場プラザ短信2

和泉プラザ　「地域の歴史的総合調査」の取り組み

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会で、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。

2010年度 和泉市合同調査（第14回）に向けて

2010年度の和泉市合同調査は、2010年9月28日（火）～30日（木）に、和泉市富秋町を調査対象地として行うことに決定した。富秋町は、和泉市北部の信太山丘陵下に広がる平野部、古代の条里耕地が残る地域にあり、近世の富秋村が近代の行政村・信太村大字富秋となり現在へとつながってきている。近世には周辺と比較して小さな村だったが、国道とJR阪和線とに挟まれる現在の町内はほぼ宅地化しており、富秋町会108世帯のほか、新興住宅地である富士203世帯・大宝220世帯・昭和住宅295世帯の3町会が存在する。和泉市中山間部とは異なる、町内に早くから宅地化の進行した平野部における地域の歴史的現在が明らかになると期待される。

第1回実行委員会は5月12日（水）に行い、実行委員長小橋勇介（文学研究科D1）を中心に、調査地の決定、日程の調整などを進め、7月8日（木）には初参加者対象ガイダンスを行った。今後は調査地についての下見や事前勉強会、パンフレットの作成などを進め、富秋町会とも相談しながら当日の具体的な調査内容・方法について議論していきたい。

和泉市富秋町の位置

■久角健二（和泉プラザ研究補助スタッフ）

現場プラザ短信3

クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

デザイン関連産業を中心とする事業者集積地域の中心に位置する本プラザは、クリエーターのオフィススペースが入居する改装されたビルの一角にあります。ここでは、「扇町プラザ」の機能を引継ぎ、大阪市全体の創造産業を対象に、その発展に向けた政策研究と連携活動の推進をめざします。

メディア芸術フォーラム大阪

制作過程を解説する中田秀人監督

2010年7月23日（金）・24日（土）、都市研究プラザは、クリエイティブセンター阿波座のあるクリエイティブ活動拠点ACDCにおいて「メディア芸術フォーラム大阪」を主催した。同フォーラムは、文化庁メディア芸術祭実行委員会の協力による、地域のクリエーターを対象としたアウトリーチ型のメディア芸術振興普及事業である。これは、「文化庁メディア芸術祭」への理解向上と関西におけるメディア芸術振興を目的としている。

23日は、デジタルメディアアーティストの人材育成を目的とした大阪発の全国学生コンテスト「BACA-JA」優秀作の公開や、兵庫県でつくられた昨年度の文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞の受賞作「電信柱エレミの恋」の特別上映と同作の中田秀人監督による制作プレゼンテーション等が行われた。また、24日は、CGクリエーターの全国登竜門である「DoGA」の受賞作と、フランスのCGクリエーターコンテストの受賞作を観客が評価を競う「CGアニカップ」を京都から迎えて開催、「関西におけるメディア芸術の創造力」をテーマに関西在住の文化庁メディア芸術祭審査委員を中心としたシンポジウムの開催等を行なった。両日あわせて300人以上の来場者があった。

プロのクリエーターが働く街である大阪において、「文化としてのメディア芸術の動向」に触れる機会が少ない中、「思いがけず創造の場に参画できる貴重な機会を得ることができた」との声を様々なかたちで来場者からいただいた。

■岡田智博（クリエイティブセンター阿波座研究補助スタッフ）

2U ジョグジャカルタでのアートイベントとワークショップ

Art Event and Workshop in Yogyakarta

G-COE文化創造ユニットが取り組んできた「ガムランエイド」の活動の一環として、2010年7月31日(土)から8月2日(月)にかけて、都市研究プラザの協力でインドネシア国立芸術大学ジョグジャカルタ校(ISI)大学院キャンパスを会場に『HARMONI』が開催された(Harmoni はインドネシア語でHarmonyの意)。このイベントは、「造形美術展(Pameran Seni Rupa)」と、「子どものための創造音楽祭2010 (Festival Musik Kreatif Anak 2010)」の2つの企画で構成された。

「造形美術展」(7月31日(土)-8月2日(月))では、3名の日本のアーティスト(池上純子、犬飼美也妃、川本哲慎)と、3名のインドネシアのアーティスト(Romy Setiawan, Hendura Himawan, and Septa Miyosa)が作品を展示した。また、7月31日(土)の夜には、作品を前にして、即興のパフォーマンスが行われた。4名の日本側アーティスト(上記3名及び佐久間新)に加え、インドネシア側のダンサー2名が即興で参加した。

8月1日(日)に実施された「創造音楽祭」は、ISIの教員らが企画したもので、ISIの大学院生等によるワークショップを通じて子どもの創造性を引きだし、西洋音楽の修得が中心になっているインドネシアの音楽教育とは異なる方向性を打ち出そうとする試みである。地元から小学校5校が参加し、成果を発表した。ISI側の企画に加えて、日本側が中心となり企画したものとして、障がいを持つ子どもを対象とした、以下に記すワークショップの成果も発表された。

『HARMONI』に先だって、ジョグジャカルタ国立第3特別支援学校(SLB 3 Negeri, Yogyakarta)の児童・生徒を対象に、4日間(7月28日(水)-31日(土))、合計約8時間にわたって、ワークショップが実施された。

このワークショップには、『HARMONI』に参加した4名の日本のアーティストとともに、中川眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)が参加した。参加した児童・生徒には、(聴覚・視覚・肢体など)身体に障がいを持つ子どもとともに、知的障がいの子どもが含まれていた。子どもたちは、日本でいう小・中・高校生に相当する学年であった。校長によると、プロのアーティストによるワークショップがこの学校で実施されるのは初めてとのことであった。インドネシアでは、このようなワークショップは極めて稀少で、貴重な試みであったと言える。

「子どものための創造音楽祭2010」におけるワークショップの成果発表

■諏訪晃一　(都市研究プラザ特別研究員)

In connection with the activities of the Gamelan Aid Project that the G-COE Cultural Creativity Unit has been involved in, the HARMONI festival was held at the Indonesia Institute of the Arts, Yogyakarta from July 31 to Aug. 2, 2010. This event consisted of a visual arts exhibition and a music festival for children.

A workshop for handicapped children was also held over a period of 4 days. Such workshops are rare in Indonesia and this was seen as a valuable experiment.

現場プラザ短信4

船場アートカフェ　芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合／媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

まちのコモンズ　日本都市計画家協会関西支部賞受賞

公開空地を活用した街頭ライブ(まちのコモンズ2009より)

船場アートカフェが地域住民と協働して行なっているプロジェクト「まちのコモンズ」が、第8回日本都市計画家協会賞関西支部賞を受賞しました。この賞は、NPO法人日本都市計画家協会が、優れた理念をもつ全国のまちづくりの取り組みに対して贈るものです。大学と地域の連携による継続的かつ実験的な取り組みが評価され、船場アートカフェと集英連合高麗橋2丁目振興町会が合同で受賞しました。

これまで「まちのコモンズ」では、地域の協力を得ながら、アートを投入することで船場がもつ歴史/文化を再発見し、まちに眠っている文化的魅力を引き出す試みを展開してきました。このような実践を継続して行なうことで人々に連携が生まれ、現在、まちには新しい活動が芽生えつつあります。今後も船場アートカフェはアートがもつ「媒介/接合する力」をまちに波及させることで、新たな都市再生のありかたを探っていきます。

■石川　優(船場アートカフェRA)

4U 研究員紹介シリーズ2 Julia Obinger

The lifestyle and consumption patterns of young 'Working Poor' in Urban Area of Japan

Julia Obinger

My research focuses on various aspects of the lifestyle and consumption patterns of young 'working poor' in urban areas of Japan.

Japan faces increasing poverty with a trend towards temporary employment while social safety nets have become unstable. Typically working full time, yet having difficulties to make ends meet due to low income and low-security jobs, most young 'working poor' are not able to live 'normal' consumption patterns and have no chance to attain the "wealth" of their parents' generation.

However, not all young 'working poor' feel like victims of the bleak economic situation or consider financial wealth as their goal of life. Instead, some of them find gratification in social, political and cultural activities while living an extraordinarily creative lifestyle within their limited financial means. My dissertation project therefore aims at exploring this emerging 'subculture' or 'creative underclass', trying to understand whether we can observe a shift in values, especially when it comes to consumption patterns and lifestyle choices within this group. Moreover, I would like to find out how they exert sustainable influence on their environments, their role in the context of "creative cities" and their potential to shape the consumption patterns of a larger part of the Japanese (mainstream) society as producers and suppliers of their distinctly "alternative" lifestyle.

I currently reside in Munich (as a Ph.D. candidate at the Japan Center at LMU Munich), but I visit Osaka on a regular basis to undertake fieldwork and further research.

■ユリア・オビンガー(G-COE特別研究員)

私は日本の都市における若い「ワーキング・プア」のライフスタイルと消費パタンに関する研究を行っている。彼らの中には、親の世代の経済的豊かさに到達する機会は持たない代わりに、「サブカルチャー」や「創造的労働者階級」を生みだそうとする動きがある。この価値の変化を探り、創造都市における役割や彼らのライフスタイル等が日本の社会に及ぼす影響について探りたいと考えている。

海外サブセンター便り from Shanghai

URP　Shanghai sub-center

上海サブセンター

上海サブセンターでは、2009年4月に「現代都市社会研究叢書」の3冊目となる『都市大開発:空間生産の政治社会学』(陳映芳等著)を出版した。院生たちと一緒に行った5年間あまりの上海現地調査をベースに、主として80年代以来の中国の「都市発展」に相関する開発主義、開発体制および社会的排除、住居生活と居住の変動、住民利害にかかわる意見表明活動などの実状の紹介と理論的分析である。G-COEの研究活動として、各種の調査活動と共同研究活動を行うことができ、中国語で50万字余りの分厚い成果を生み出した。

2009年9月には、よいニュースが飛びこんできた。同叢書の2冊目である『現代都市更新と社会空間の変貌: 住宅・生態・統治』(林拓・水内俊雄等著、2007年4月出版) が中国教育部から「大学科学研究優秀成果賞(人文社会科学)」(三等賞)を受賞した。

また、2009年10月18～19日には、「都市社会構造の変動と再編国際シンポジウム」を開催した。中国大陸、香港、台湾並びに日本、アメリカ、フランスなどの学者80人がこの会議に参加した。上海サブセンターの「老朋友」である都市研究プラザ特別研究員の中岡深雪氏も参加し、上海不動産市場に関する論文を提出した。

さらに、「都市住民生活と居住の改善」をテーマとした研究クループを結成し、2009年末から現在まで、上海を中心として、現地調査活動を続けてきた。露宿者(野宿者)問題を一つの重要問題としているが、中国の住宅保障制度と都市管理体制のもとに存在している深刻な住居難問題を描き、同時に、社会に実際に存在している改善システムを発見することをめざしている。これは今年度の研究報告とする予定である。

■陳　映芳(華東師範大学教授)

At the Shanghai Sub-center, *Giant Urban Development: Political Sociology of the Production of Space,* by Chen Ying-Bang, et. al. was published in April 2009 as the third volume of the *Annals of Contemporary Urban Social Research*. Also, the second volume in this series, *Contemporary Urban Renewal and the Change of Social Spaces: Housing, Ecology, Government* (by Lin Tuo & Mizuuchi Toshio, et. al.) received Third Prize in the University Science Research Superior Achievement Awards (Humanities and Social Sciences) given by the Chinese Ministry of Education in September, 2009.

On October 18-19, 2009 an international symposium was held on 'Change and Restructuring of the Urban Social Structure.'

Additionally, a research group has been organized on the theme of 'Urban Residents' Livelihood and Housing Improvement' and it has continued field research centered on Shanghai from the end of 2009 up until the present. This group intends to issue a research report this year.

3U 社会包摂ユニット研究会・ハウジングイニシアチブ研究会の研究報告会

The 3rd Unit Research Meeting and Reports from the Housing Initiative Research Group

2010年5月27日(木)、G-COE社会包摂ユニット研究会とハウジングイニシアチブ研究会(以下HI研究会)の共同で「はたして複合的な居住支援は住宅困窮層の居住支援に有効なのか-住宅困窮層への複合的な居住支援モデルの日韓比較-」の研究報告会を西成プラザで行った。今回の研究報告は、2009年度第一住宅建設協会(「日韓における住宅困窮層への包摂的な居住支援モデルの構築に関する比較研究」代表:全泓奎(都市研究プラザ准教授))による研究助成を受けて実施した研究の成果報告会を兼ねたものであり、その研究組織がハウジングイニシアチブ研究会である。

居住におけるセーフティネットの機能不全の下、無料低額宿泊所問題やネットカフェ難民等脆弱な居住状態がマスコミで取りざたされ、ホームレスを始めとする居住困窮層の居住問題が都市問題の一つとして注目されている。これらに対しては、主として福祉の領域でしか対応されてこなかった経緯があるが、様々な形で社会的不利が増している中、複合的なニーズに対応していくための新たな社会システムの創出が求められている。一方、近年、「居住」と「社会サービス」との複合化による支援の重要性が注目され、路上や簡易宿泊所等に居住する住宅困窮層に対し、民間の住宅を住宅困窮層の生活再起の場として活かしつつ、住宅及び生活管理の支援を民間団体に委託する、いわゆる「ハウジングファースト型事業」(あるいは「支援付き住宅アプローチ」)が日韓の支援現場でみられている。そこで、新たに社会的な対応が求められる住宅困窮層への「居住及び生活ニーズ」に対し、既存の施設や制度に捉われず、民間の潜在的な居住資源や人材を活かして住宅困窮問題に対応してきた両国の取り組みについて日韓共同研究体制を組み調査を実施した。本報告会では、その両国の居住支援策の有効性を検証した調査結果について報告を行った。

報告会のプログラムは水内俊雄(都市研究プラザ教授)からの開会挨拶を始め、4名の研究報告の発表、本報告に関する3名のコメント、質疑応答・総合議論の順で行われた。報告発表は「研究概要及び東京都地域生活移行支援事業における利用者の居住ニーズ」(全泓奎)、「東京都地域生活移行支援事業における事業受託団体の支援実態と課題」(稲田七海:G-COE特別研究員)、「韓国・単身階層向け買上賃貸住宅事業における事業受託団体の支援実態と課題」(全昌美:G-COE特別研究員)、「韓国・単身階層向け買上賃貸住宅事業における利用者の居住ニーズ」(平川隆啓:G-COE特別研究員)、「研究のまとめと今後の課題」(全泓奎)の順で行われ、各々20分ずつ発表を行った。

研究報告会の様子

その後、コメンテーターの矢野秀喜氏(東京都特別区人事厚生事務組合厚生部自立支援課主任)、安江鈴子氏(新宿ホームレス支援機構理事)、笠原正之氏((社福)みおつくし福祉会、救護施設淀川寮主任)からは、両国の取組みにおいて住宅困窮層のためのハウジングファースト策が重要かつ有効であるとの評価があった。また持続的な居住安定のためには、住居や生活サポートの他、伴走的な就労サポートが付加されるべきというコメントがあった。質疑応答では、韓国における単身階層向け買上賃貸住宅モデル事業の位置づけなどに関する質問があった。

両国の住宅困窮層向けの支援は支援策としては終了したが(韓国では単身向けのみ終了、チョッパン・ビニルハウス向けなどについては展開中)、今後も継続的な調査(日韓とも)を通じ、住居+生活+就労が一体となった複合的な支援策の模索が必要であると考えられる。

■全昌美(G-COE特別研究員)

On Thursday May 27, 2010 the URP's the 3rd unit Research Group and the Housing Initiative Research Group jointly held a research report session at the Nishinari Plaza on the topic, 'Is multipronged housing assistance really effective in helping the housing-poor? - a comparison of Japanese and Korean models of multipronged assistance for the housing-poor.' At this report meeting, in dealing with the housing and livelihood needs of the housing-poor, which require a new social response, a joint Japan-Korea position was formed regarding, in both countries, not encouraging existing facilities and systems but working towards utilizing the dormant housing and human resources of the private sector to respond to the problems of the housing-poor, and reports were given on the results of surveys testing the effectiveness of housing aid policies in both countries. Commentators responded positively to the message that the 'housing first' policy for the housing-poor is both important and effective. There was also a comment that for sustainable security in housing, in addition to housing an livelihood support, job-finding support should be added to the package.

現場プラザ短信5

西成プラザ 生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が集積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。

釜ヶ崎資料センターの新装

都市研究プラザで長らく釜ヶ崎アーカイブ事業として大学にて資料整理をおこなっていた釜ヶ崎資料センターの資料は、「大阪自彊館・あいりん資料室」に移転しまとめられる形で、8月に正式な開室を経て披露される予定である。開室準備中の資料室のドアを開くと、資料や書籍がひしめく光景が目に入る。釜ヶ崎の運動関連のビラや冊子を中心に資料の内容は多岐にわたり、その数は数千点におよぶ。現在、室長の松繁逸夫氏がこれら膨大な資料を整理する作業を進めている。これらの資料は一つ一つが釜ヶ崎の歴史を雄弁に物語るものであり、計り知れない資料的価値をもっている。資料室は地域史を知るための窓口として、重要な役割を果たすことだろう。資料は誰でも手にとってみることができる体制になるので、いちど訪れてみてほしい。なお、この資料室の運営には、西成プラザが協力していくことになる。

■原口 剛(都市研究プラザ特別研究員)

新今宮駅前にある資料センターの入り口

現場プラザ短信6

大淀プラザ ホームレス支援から地域のネットワーク/人材の創造

旧大淀区天七に立地し、近接して更生施設や一時保護所、ホームレス自立支援センターの大阪市の日雇、ホームレス支援施設があります。元銭湯を利用した本プラザは、ホームレス現象のオブザーバトリ(観測所)として後方支援にあたり、同時に広い空間を利用した、アートによる地域ネットワーク創造、人材創出の拠点をめざしています。

大淀寮とその退所者の簡単な分析紹介

2007年度より長柄プラザおよび移転後の大淀プラザの事業として、連携する更生施設大淀寮利用者の住生活実態調査のモニタリングを実施してきた。成果は堀江により「ホームレスと社会」1号(2009年10月、明石書店)で「生活保護施設の利用者の変容と近隣地域との関係形成」と題して報告し、また施設退所者のアフターケアと生活実態を知るために、住宅総合研究財団より助成金を得て調査が開始されている。簡単に大淀寮の利用者と退所者の実態を紹介したい。

1975年より2009年までの延入所者数は4,088人、年間平均約120人で、複数回利用者した人は全体の10.0%である。平均年齢は53.9歳であるが、2009年の6ヶ月間は48.2歳と1979年以降、割り込むことの見られなかった50歳を下まわっている。平均在籍は376.7日だがばらつきが大きい。およそ半年で全体の約5割、一年で7割が退所する。退所理由で最も多いのは、「希望」退所の34.5%であり、「就労自立」13.9%、「勧告」13.7%、「入院」13.6%、「無断」13.1%と続く。近年の特徴として若年化と在籍期間の短縮化がみられた。

退所者が任意で入会するOB会の会員は222名で、平均年齢は60.5歳である。収入形態は、就労13.5%、全保護(生活保護のみ)62.6%、半就労・半保護12.2%、その他・不明10%である。施設の立地する同じ区内に43.4%、隣接する2区を含めると57.2%の人が施設近隣に居住し、それ以外は市内の広範囲に居住している。退会した79名中35名は死亡による。うち25名の葬儀は親族と音信不通等の理由で通所者のアフターケアを担当する通所事業部が中心となって執り行われた。

このような調査をもとに、大淀プラザでは、退所者の地域生活を支えるため、芋プロジェクトや座禅会等を通じて地域や退所者間の交流活動を展開している。

■堀江尚子(大淀プラザ研究補助スタッフ)

現場プラザ短信7

阿倍野プラザ 近代長屋を活用した居住福祉支援の試み

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。

まちづくりと宗教

阿倍野プラザでは昨年8月からReligion-Cafeというイベントを通じて宗教知と市民知が交錯する場の創造を模索しており、これまでに様々な宗教の実践者を招いている。とりわけReligion-Cafeが重視しているのが宗教者と人々/地域との関係である。「宗教者が人々/地域とどのように関わりあっているのか」という具体的な話題を通じて、市民に宗教の役割や価値を身近に感じてもらおうと考えている。

Religion-Cafeの特筆すべき点は、そのイベントの構造である。通常、講演会形式のイベントは、無機質な空間で講師の講演と短時間の質疑応答が行われる。対してReligion-Cafeは住宅街にある小規模な長屋で行われる。参加者は座布団に座って話を聞く。20人も来れば満席になるキャパの狭さはかえって場の雰囲気を和やかなものにする。1時間程度の講演が終わるとティータイムとなる。地元のcafeで仕入れたスウィーツに舌鼓を打ちつつ、参加者全員から質疑がなされ、それらに講演者が応答する。これが実に1時間近く及ぶ。Religion-Cafeの場合、質疑応答はイベントの「おまけ」ではなくイベントを輪郭づける重要な要素となっている。

講演内容に通じた者から門外漢の者まで、各人が思ったことを率直に講演者にぶつけていく様は他のイベントではなかなか見受けられない特徴で、Religion-Cafeの魅力となっている。このことを可能たらしめているのは、まさに阿倍野プラザがもつ「空間の力」だろう。今後も空間のポテンシャルを活かした内容の企画を展開していきたい。

■白波瀬達也(G-COE特別研究員)